
ミルクキャンディ

日向 銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルクキャンディ

【Zコード】

Z3220D

【作者名】

日向 銀

【あらすじ】

私の友達に彼氏ができた。けれど、私はどうしても喜ぶことができなくて……。この胸の痛みは何だらう。イチゴキャンディ、レモンキャンディの続編。

(前書き)

イチゴキャントリィ、レモンキャントリィの続編です。

「夕陽先輩」

1年生で学校一のイケメン。

そんな彼が、私に声をかけるなんて極稀なこと。

「あら…、れん君から声をかけてくれるなんて光榮だわ」

「おね～さん、ビニ？」

綺麗な顔を目の前にテンションの上がったミーハーな私をそつちの
けで、れん君はあたりをキヨロキヨロ見回した。

おね～さんとは私の親友のことと、彼と付き合いだしたのは「ぐ最
近のこと。

「しぐれなら、さつき食堂で元嶺と早食い対決してたわよ」

私は負ける試合なんてしない主義だから、抜け出してきたけど。

「元嶺…？」

「そ。仲の良い男子」

「ちつ」

れん君はイライラした様子で、走り去った。

そんなにしぐれが好きなんだね。

私は後ろ姿を複雑な心境で見送った。

元嶺はしぐれが好き。

前にそんな事をうつすらと彼の口から相談されたから。
でも、れん君には言わなかつた。
ううん、言えなかつた。

しぐれの親友として、元嶺の親友として、嬉しいような寂しいような。
れん君としぐれは上手くこつてほしいけど、元嶺だって友達だから。

しぐれはするいや。

私だつて

「愛されたいな…」

「誰に…さつきの少年に？」

「ひはひっ」

急に後ろから頬をつかまれて、つねられる。

痛い、と叫ぶのが言葉にならず、何ともマヌケな声が出た。
それを聞いて、腹を抱えて笑っているこのガキみたいなのが元嶺。
私としぐれと仲の良い男子。

「何すんのよー…、それより、あんた早食い対決は？」

「だいぶ前に終わつた。俺の圧勝でな！」

満足げにふんぞり返つて、ケタケタと笑う。

馬鹿馬鹿しい。

女子相手に何を向きになつてんだか。

そう思いつつ、何故か顔には笑みが浮かぶ。

それがバレないよつに、私は軽く俯いた。
だって嫌じゃない。

こんな馬鹿話で笑つちやつよつな女つて。
そんなのモテないもの。

「あ、そつ」

心底馬鹿にしてこねよう私は言つた。

「冷てえな~」

口を尖らじてスネる元嶺を横田に、私はれん君に言つた言葉を思い出した。

「あーれん君に嘘教えちゃつた」

「良じんじゃねえの? ほつとけば」

「ダメに決まつてるじゃない!」

私は階段を駆け下りた。

食堂にはしぐれはいなつて立えなきや。

「俺も行くー!」

「何であんたが来るのよー!」

れん君が嫌いじゃないの!?
わざわざ見に行く必要ないとつづ。

そう内心では思いながら、一度言に出したら聞かない彼の性格から

して、言つても無駄だろうとため息をついた。

「別に良いだろ。あ、ほら少年発見～」

私は元嶺が指さした方向を見た。

そして走っていた足をゆっくり止めた。

「あ、なんだよ。しぐれに会えたのかよ。疲れたのに、走った意味ね～」

だから止めたのに。

こんなのに見たら元嶺傷つくのに。

しぐれもしぐれよ。

元嶺の気持ちに気づいてあげてよ…。

しぐれは美人だし、性格良いし、最高の友達よ。

でも、でも…

私は元嶺の傷ついた気持ちを考えるだけで、胸のあたりをしめつけられた。

元嶺も元嶺だわ。

気持ちを伝えてしまえば良いのに。
いつまでも報われない思いなんて。
そんなの、悲しいじゃない。

「何黙つてんだ～？」

「何でもないわよ～！」

涙腺が緩むのを、下唇を強くかんでこらえた。

「私…、帰る」

痛い胸をおさえて小さく呻く。

「え、おい。5限は？」

「…教室に、帰るの！」

度胸ないな…。

授業サボるなんて、私にはできない。

私は元嶺のことが見れず、足元をただひたすらに見つめた。顔を上げれば、きっと元嶺の無垢な笑顔があるだろう。けど、今の私は、それにさえイライラしてしまいそうだから。

「お前、度胸ねえな～」

「……………」

さつき駆け下りた階段をゆっくりとのぼった。

元嶺は何も言わず、ゆっくりと後ろをついて歩いてる。

ねえ、私はひどい？

最高の友達に彼氏ができる、喜んでいるのに。

私は元嶺に自由になつてもらいたい。

無理に笑わないでほしい。

1段1段敗北感のようなを感じながら、教室を田舎した。

放課後、私は元嶺が遊びと誘ってきたのを断り、1人で中庭に腰掛けた。

「夕陽先輩」

私の頭上から降ってきた言葉に私の体は過剰に反応した。
何かを張り詰めていたからかもしれない。

私は慌てて声をかけてきた人を振り返った。

「な、何だ…。れん君か。どうかしたの?」

「別に。隣良い?」

「ん~。良くないかな。しぐれに怒られるしね

つて言つてゐそばから横に座つて、れん君はあくびをしている。

「何しに来たの?」

「別につて言つたじやん

私はため息をもらした。

「れん君、しぐれを泣かしたらただじゃおかないとんだからね」

「言われなくとも

そう言つて、れん君は物思いにふけつていた。

しぐれの事を思い出しているのだろう。

いつもポーカーフェイスの彼が、優しく笑つたのだから。

「私が不幸せなぶん、しぐれは幸せでいてほしいの」

しぐれを妬むなんて気持ちはつまれない。
私はしぐれが大好きだから。

ただ、虚しいだけ。

元嶺の気持ちが、私には痛くて。

「夕陽先輩が不幸せ？」

「どこが？」とも言いたげな視線に私は苦笑した。

「何よ、私だっていつも騒いでるわけじゃないのよ？」

「何が不満なの。この学校？」

「それはれん君でしょ」

だつたら何が？と聞いてくるれん君に、私はたじろいだ。
れん君の彼女のことを好きな男子、そう、元嶺の気持ちを察して胸
が痛い、だなんて言えそうになかった。
目をそらして黙り込む私を見て、れん君は何も言わなくなつた。
静かな時がながれる。

こういう沈黙が苦手な私は、必死に話題を探した。

「元嶺とかいう奴といる時、夕陽先輩をうやつて話題探す？」

心中の人物の名前がれん君の口から出で、私はぎょっとした。
一呼吸して、私は口を開く。

「んー…どうだろ。あいつは常に喋つてる」

「夕陽先輩は不幸じやないよ、それに本音つて大切だと思つ。あと

勝手に解釈しないこと

何を言つてゐるんだろう。

私は頭をかしげた。

もしかして励ましにきててくれたのかな。

そうだとしたら、嬉しいな。

「ありがー…」

「おーい少年。てめえ俺の女に手出すなよ」

「元嶺！？」

元嶺が中庭に面する2階の廊下の窓から顔をだした。

「あんたの女じやないじやん」

れん君は私を一警して、元嶺を睨み付けた。
何ともいえない空気が漂つ。

「夕陽は今から俺の女になるんだよつー」

そう言つて、元嶺は窓から身を乗り出し、飛び降りた。
ズダーンという重い音と同時に「いつてー」と元嶺は小さく声をも
らす。

「バカじやないの。じや、夕陽先輩、俺行くから

「え? あ、うん。ありがとうね」

私はれん君の後ろ姿に大きく手をふった。

「ゅ～うひー」

そういつて元嶺は私の肩に肘をかけて、小さくなつたれん君の後ろ姿と一緒に見送つた。

私はれん君の言つた事を考えながら、元嶺の方にふりかえる。

「なに…？」

「お前俺との約束断つて…まさか…親友の彼氏と浮氣するなんて」

「しません！」

私は、私よりも高い位置にある元嶺の皿を睨みつける。

「俺といつものがありながら」

「何それ、ドラマのセリフ？」

「俺のところに帰つておいで

「くわこつてばー」

私は笑いながら、元嶺の肩を叩いた。

いつもならすぐに返つてくる笑い声が、今日は一向に返つてこない。不安になつた私は、元嶺の顔をのぞき込んだ。

「もと…み…ね？」

彼の顔は今まで見たことがないまでに真剣で、そして少し切なそうだった。

「わかつてねえな。俺がどれだけ夕陽の事が好きか」

唸るよつに告げられた言葉に、私の顔は一気に熱をもつ。好きつて……。

「だつてあんた、しぐれの事が好きなんじや……」

「俺はずっと夕陽が好きだつた！」

何を言つてゐるの。

彼の言葉が頭で木靈して、クラクラする。

「だつて、前言つてた！俺、しぐれが好きだつて」

「俺しぐれが好きだ」

彼はそこで一皿言葉をとめて、頭を搔いた。

「友達として。夕陽の事は本氣で好きだつて言おうとしたらい、お前が勝手に納得して……」

私は思い出していた。

しぐれが好きだと聞いた私は、彼が次の言葉を発する前に、応援するよ！と笑顔で言つたことを。

その時から、胸がズキズキと痛むよつになつたことを。

「そんの……私最低じゃない」

「そりだそりだ！今頃気付いたのかよ？俺がどれだけ胸を痛めてきたことか…」

「「」めん」

心からの謝罪。

今までそんなに傷つけてたなんて、私知らなかつた。

「それってさ、どっちの「」めん？」

彼は首をかしげて不安そうにこちらを見る。

「俺と付き合つのは無理つてこいつ「」めん？それとも——

「違う！」

私はどしさに出た、自分の声の大きさに驚いた。
違つ、違つ。

「やつと氣付いたの。私元嶺が好き」

……言つた。

胸がズキズキしてたわけを、やつと氣付けたの。

「氣付くの遅すぎだら」

大きなため息をもらし、しゃがみこむ元嶺の横に、私もしゃがみこんだ。

「夕陽、ミルクキャンディあげる

「…………は？」

「記念日には飴をあげろってしぐれが言ってた

そういうことか。

私たちの記念日は、ミルクキャンディ味つてことね。

「甘つたるい感じするわね」

「俺は好きだけど」

「私だって」

2人でクスッと笑えば、綺麗な夕日と同じ色に頬を染めて、手をつ
ないで帰った。

(後書き)

長くなつてしまつました。
グダグダしてゐるなー…
と反省したり。

でもキャラ的には、れんより元嶺の方がしつかりたつてゐる気がする
⋮?笑

キャンディイの話はこの3つで終わりました! (たぶん)
3つ読んでくださつた方、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220d/>

ミルクキャンディ

2010年10月16日07時57分発行